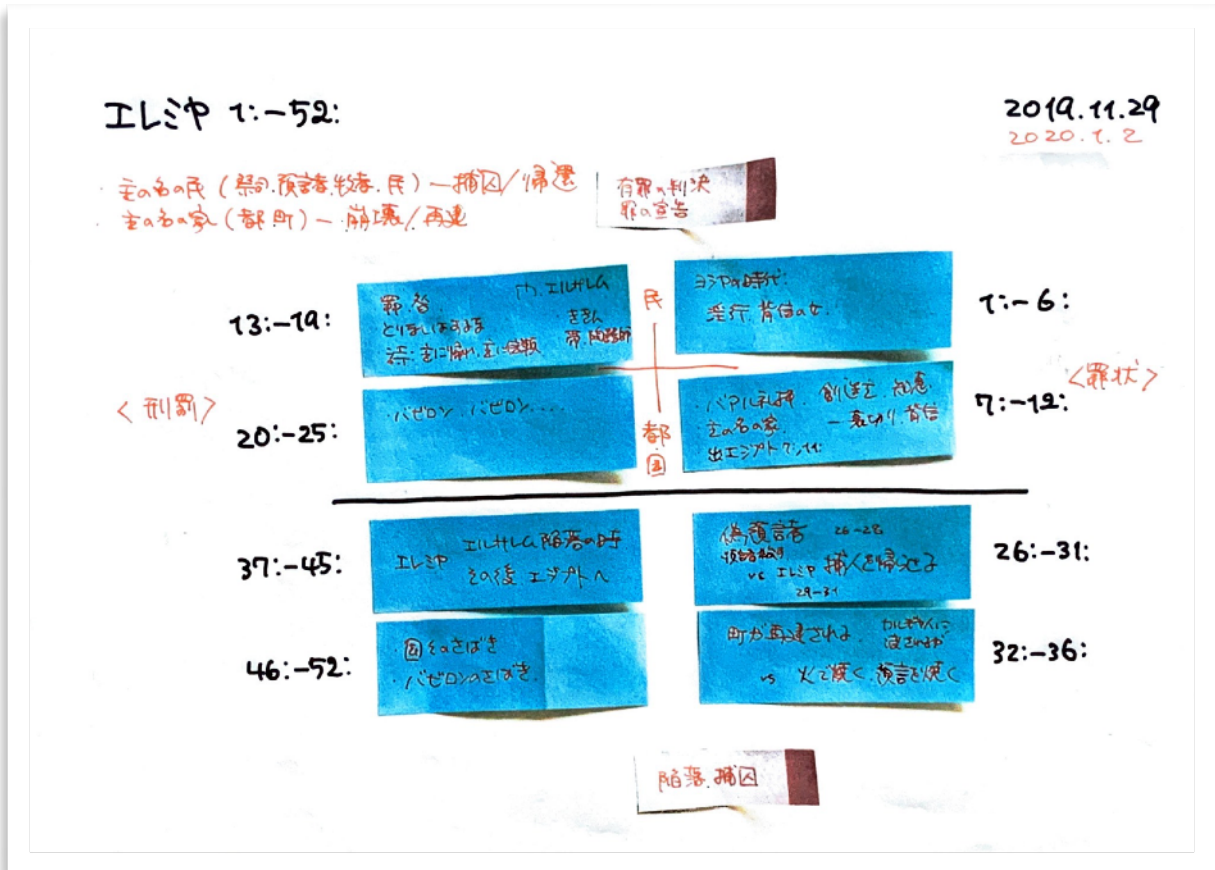




エレミヤ書 1:-52:



エレミヤ書の分析を始めました。エレミヤ書は、イザヤ書と同じぐらいの長さです。新改訳の聖書でいうと101ページあります。A4の紙に2ページずつで50枚。イザヤ書も同じように101ページということですので、同じぐらいの長さの書物です。

エレミヤ書全体の構造の分析をするのに、イザヤより簡単そうと思いました。それはなぜかと言うと「何々王の第何年に、こういうことばがありました」という言い方が、随所にあるわけです。そういう「エホヤキムの1年に」とか「ゼデキヤの10年に」というような言い方があるので、章の分かれているところが分かり易くて、順番に並んでるのかなと思うととんでもありませんでした。あっちに行ったり、こっちに行ったりして、時間順にも書いてないですね。時間順に書いていないにもかかわらず、まとまりも非常に見えにくいということで、段落の分析をすることが難しいです。ただ大きな流れは、こうじゃないかなみたいなのは言われますけれど、大き過ぎて、なかなかうまく分けられてないとかいうのがいつも参考になっている本です。ゴードンフィーや、ドーシーや、エドワードヤングのものも、全体の流れを掴むのに苦労しているように思われます。なおかつ、名前が困りました。王様の名前が、エホアハズと、エホヤキムと、エホヤキン。しかも、この名前が、エホアハズはシャルムという名前もあり、エホヤキンはエコヌヤと呼ばれることもあって、その言い方が、違うところで、違う言い方で出てきたりしますので、それも混乱を招きます。

それと良い王様のヨシヤ。ヨシヤの子供のエホアハズ、次エホヤキム。エホヤキムの子供のエホヤキン。今度おじさんに戻って、ゼデキヤという、父、子、子、孫、子と言って、戻ったりするので、それも分かりにくい。歴代誌の中では、長男がいるのですが、長男はこの中に出てきません。次男、三男、四男と出てきます。でも、そうすると年数が合わないのです。「何年の時に」と言うと、歴代誌の中で「一二三四」と言っているのは「長男次男」と言っているのか、その生まれた順番じゃなくて「第一王子、第二王子」と言っているのか、多分その第一王子、第二王子という方が言われているところなんだろうというようなことを見ないといけない。名前自体も非常に分かりにくいので、時代順も分かりにくいということです。

それぞれ、ここに書いてありますので、それを見て確かめなくてはならないのですが、列王記と歴代誌、それとエレミヤ書の中の言い方を見たりして、この兄弟関係を確認する。マタイ福音書のところには、エコヌヤと書いてありますね。それが分かりにくいことのもう一つ。それと中心人物は、エホヤキムとゼデキヤです。ヨシヤの時代のところも書いてありますが、エホアハズは、王様になったら、すぐ3ヶ月でエジプトに連れて行かれます。それで、エホヤキムが11年間治める。次の王様のエコヌヤは、すぐに3ヶ月でバビロンにつれて行かれます。それで、ゼデキヤが11年間治めます。3ヶ月、11年、3ヶ月、11年。これも混乱しますよね。3ヶ月、11年、3ヶ月、11年という支配の中で、エルサレムに捕囚になるということです。それを見ている箇所、誰の第何年にと書いてあるエレミヤ書の箇所と、そこに続いて、エレミヤ書のこの章は、いつのことだろうというものを確かめるということです。

それを横に展開しました。1章から52章までの中で書かれているのはこの時でしょうということがこちらの表にあります。こちらが支配の何年。それでここが王様の年齢。それで第何年にと書かれているところ。それでエレミヤ1章から52章まで、1章から3章あたりはこの年代だろうと。ヨシヤの13年にエレミヤは預言の働きをするようになりましたということが書いてあります。456と続いていますけど、これはヨシヤの何年かは分かりませんが、続いている話です。7章のところで話が変わって続きます。13章からのところもまだずっと続いて19章までは第何年という言い方が書いていません。25章まで書いていないです。20章から24章のところを見ると、ゼデキヤ王の時代だということが分かりますので、ここ(19章)から話がずいぶん飛んでいますね。25章、26、27、28。32から上がって、また36でここに(時代が)戻る。37、38、39があつて、ここに行く。でまた戻ると。戻って最後ここまでという、時代が行ったり来たりしてる感じです。

行ったり来たりしている感じはするのですが、大きく流れを見た時には、このヨシアの時代ということと、このエホヤキムの4年は、ダニエル1章を見ると分かるように、ネブカデネザルの1年なんです。ここエレミヤにも書いてありますが、ネブカデネザルが王になった年がエホヤキムの4年で、その時のというのが、25章、36章、45章。この3箇所は同じ時の話をしてしています。これが前の章の終わりをどうも表しているようですね。ここに戻る感じです。これが戻るのか、さばきのスタートなのかという感じです。エホヤキムの4年あたりの話。それでゼデキヤが最後に連れて行かれる時の王様ですけど、ゼデキヤの11年のうちの最初の方の話と、終わりの方の話というように、大きな時代のまとまりでいうと、ヨシヤの時、エホヤキムの時、ゼデキヤの始めの方、ゼデキヤの終わりの方という4つの時代に分かれるのじゃないかなというふうに見えます。その時代の区分と内容を見ながら、聖書の分割をしないと一度に読めませんし、神様も分けてくださっていますので、分けましょうということです。

まず大切なエホヤキムの4年、ネブカデネザルの1年というのが、25章、36章、45章にありますので、1章からここ25章まで、36章まで、45章まで、46章からという4つにま分けられる。まず1つ目が25章まで、2つ目が36章まで、45章までが3つ目で、46章から52章までという、大きな4つに分けられるでしょうということです。46章からはそうやって見ると、国々へのさばきが、46章もネブカデネザルの1年の話なのですけれど、ここから始まって47章、48章、49章、これは1年ずつというよりは、この後どうなっていくかということが、46章から49章まで。49章のところにゼデキヤの始めの年という形で、また話が進んでいますので、ずっと国々のさばきは時間順に進んでいって、バビロンのさばきの預言までこう続いていくという形ですね。ということで見ると、46章からは国々のさばきという段落でしょう。

次に26章から32章まで。32章がゼデキヤの10年と言っています。10年、11年の話に変わりますので、エホヤキムの1年、ゼデキヤの1年、ゼデキヤの4年と、ここは時間順に進んでいきますから、この流れで一つの段落の26章から31章です。31章と言っている理由は、30章と31章のところに「囚われ人を帰す」といういうことが書かれているので、一つのまとまりの預言として見るができるのじゃないかと思えます。32章と33章のところで「町が再建される」という預言で、その後が「エレミヤが監視の庭にいる時に」ということを言われていますので、時代が預言している内容は同じように、「囚われ人を帰す、町が回復される」なんですけど、この預言の時代が変わっていますので、ここで一つの区切りというように見て、36章までが一つ。

次に見ないといけないのは37章から45章まで。この37章から45章までは、エルサレムが陥落するその時に、エレミヤはどんな扱いをされていたのか。穴に入れられて、監視の庭にいて、そしてエジプトに行くという人たちに連れていかれてしまう。侍従長ネブザルアダンとゲダルヤというような人も出てくる。エレミヤがどういうふうに通かれていったのかというのが、36章からのまとまりなので、まこれが一つのまとまりになってるでしょうと。それと今言っていた26章から36章までが一つの段落として見れるのですが、さっき言っていた30章、31章あたりのところの分け方が分けにくいので、後にもう一度説明します。

20章からのところということで、20章から25章というふうに、この1章から25章の中で時間が違っていますよね。エレミア書でバビロンが来てさばくというのが、ずっと言われているのですが、「バビロン」という言葉は149回も出てくるのです。ですが、19章まではバビロンというのは出てこないのです。20章からバビロンが150回ぐらいここに出ているということです。20章からのところは、バビロン、バビロンと分けられるということです。

1章から19章までを分けないといけないですね。ここは、1章から6章までがヨシヤの時代にと言われてます。それは分かりやすいです。ヨシヤの時代にということなのですが、そこは「淫行、背信の女、裏切り」みたいなのがホセアの本物みたいな感じで出てきます。その出だしがここにあります。7章で「主の門に立って宣言せよ」と言われるところに変わりますが、場面が変わりますよね。ここは「バアル、バアル、バアル、バアル」というのが12章まで続きます。バアルを礼拝する。主の名の家が付けられているその家で、バアルを礼拝する。シロの天幕のように捨てられると。エジプトから連れ出されたのに、ということが7章、11章で言われたり、創造主と偶像という戦いがあったり、知恵という言葉があったりして、この7章から11章までが一つの段落です。バアル礼拝という感じですね。

13章から19章はどういうまとめだろうというと、ここには「罪、咎」、これがずっと出てきます。13章から19章にしかこの言葉はないです。「帯を締める」何だろうその行動はと、「陶器師のところに行け」これは何だろうというような、行動での預言みたいなものもありますね。それと、「とりなしをするな」と2度も言われますし、「主に帰れ、主に信頼せよ」というような歌も入っています。「エルサレムの門の中で」というまとめが見えますので、13章から19章までということですね。これでヨシヤの時代、バアルの礼拝、罪と咎、バビロンと。

それで今度26章から話が変わるのですが、26章から36章までのところを2つに分けると、片方は、偽預言者、預言者を殺すというところから始まるんですね。預言者を殺す、偽預言者。しかし、囚われ人は帰されるという話があります。町が再建される。カルデヤ人に渡されますけど、町は再建されるんだということに対して、町は一度火で焼かれます。36章に巻物をバルクが書けと言われて書きますけど、この時がエホヤキムの4年なんですね。この時にエホヤキムはそれを読ませながら火で燃やす。火で燃やすんですけど、バルクはもう一度全部書き直すという箇所があります。「火で焼く」というのがこの「町を火で焼く」という言葉と同じですね。火で焼く、そしてみ言葉を火で焼く。み言葉を焼くのと預言者を殺すのと同じことですね。神様の言葉を聞きたくないので、預言者を殺すという、火で預言書を焼きますけど、もう一度書かれると。火で焼きますけどもう一度再建されるということにその出来事が象徴として表されているのかなと思います。

全体として、この8段落で構成されているのではないかとということで、それぞれの段落をこの後分析していくことになります。前半の25章までは有罪だとという判決が下される。後半は、その判決が下されたものに対して、罰が下されていくというのが26章からということですね。ですから、前半は、「罪の宣告、有罪の判決」。そして「陥落と捕囚」という後半というのが、エレミヤ書全体の流れなのではないかと思っています。